

「が」と「は」の意味, その背景と形態¹

認知と表現の観点から

鄭 聖 汝*

キーワード: 認知角度, 表現意図, 内部向けの判断, 外部向け痕跡の判断, 背景と形態

要 旨

本稿では、「が」と「は」の用法, 意味, 意味の背景と形態などを分析・記述している. 分析の方法は, 人間の奥にある思考の型を形態心理学的根拠より探るとともに, 文構造とかコンテキストの中での「が」と「は」の使い方からは解明できなかったその根本的理由を, 言語以前に働く人間の内部的認知活動の観点から解決しようと試みた.

その結果は, 大きく次の五つに要約できる.

1. 「が」と「は」は, 発話時, 時空間的制約があるか否かによって, 次のような名詞句と述語との共起相を表わす.
 - 具体的, 個別的なもの: 一時的状態, 動作.
 - 観念的(抽象的), 総称的なもの: 恒常的状态, 属性.
2. 「が」→「は」への展開は, 心理哲学でいう認知→洞察→認識→観念の発達過程と相まっているようである.
3. 「は」には二つの働きがある. それは「内部向け」と「外部向け痕跡」の働きである. この二つの働きによって, 「は」の用法は「品定め主題」, 「不問の対照主題」, 「表別の対照主題」と区別され得る.
4. 「～は～が～」文において, 「が」の用法は「は」によって制限を受ける. それは必ず, 「品定め主題」——「とりたて」, 「不問の対照主題」——「中立叙述」の共起相を持つ.
5. 「～は～が～」文において, 「は」と「が」は背景と形態の関係にある. 「は」を用いていない動詞文の場合は, 「は」の代りに時空間的要素がその背景となり, 同時に主題化する.

はじめに

「が」と「は」に対しての今までの研究は, 文構造の面においては命題と「モダリティ」という二元的構造の側面から接近し, 意味用法の記述の面においては, 主に文のレベルか談話文のレ

* CHUNG Sung Yeo: 孝令高等学校日本語教師および大邱専門大学観光日語通訳科非常勤講師, 韓国.

¹ 形態心理学でいう「背景と前景」の用語をサルトルの用語法に倣って「背景と形態」として用いた黒田成幸(1976: 145)に従った用語である.

ベル、あるいは語用論的次元から取り出して、その意味と用法を論ずる形を取ってきた。そこで意味用法は「中立叙述」と「総記」²、「主題」と「対照」として、また情報伝達論的立場からは「未知」・「既知」という概念として区別されている³。

ところが、意味用法の捕らえ方が、文か談話文の中からすでに表現されたものを対象にしているので、話し手の表現しようとする表現そのものにまでは十分の考察がなされていなかった。それは言語以前の人間の内部的認知活動を認めない言語観⁴に縛られていたと解され得る。

したがって、本稿では人間の奥にある思考の型を形態心理学的根拠より探るとともに、文構造とかコンテキストの中での「が」と「は」の使い方からは解明できなかったその根本的理由を、人間の認知活動という観点から解決しようとする態度を取る。それで認知の仕方と表現意図からその用法、意味、意味の背景と形態を論じていく順をとる。

1. 「が」と「は」による認知と表現

「が」と「は」は、客体的事象 (dictum) に対しての話し手の認知角度と表現意図からその区別が生じてくる。これは言語以前の形態認知にも深く関わっていることが分かる。

(1) a) 雪がまぶしい。

b) 雪はまぶしい。

(1a) は「中立叙述」、(1b) は「主題」、それと同時に「とりたて」(1a) と「対照」(1b) の解釈もできるとされている。そして、このような用法はコンテキストより区別され得るとする。しかしコンテキストの中での使い方は、その文章構造の類型に合わされているので、そういう表現をする根本的な理由の解明にまでは至っていない。すなわち、次のように「主題」は「主題」、「とりたて」は「とりたて」としてすでに決められた答えが要求されるのが、もっとも一般的である。

(2) a) 鯨は何ですか。

b) 鯨は動物です。

(3) a) 誰が走って来ますか。

b) 太郎が走って来ます。

では、(1) の例に戻って発話の際の表現に即して考えてみよう。

まず、(1a) を眼前描写として用いたとすると、そこには二通りの表現があることが認められ

² 以下、「とりたて」とする。

³ 本稿では、久野暲(1973)による用法区別に従った。

⁴ ソシュールの「言語先行説」を指す。それは、記号表現の上で区別がなかったら概念も区別し得ないという論理に帰結される。詳しくは、国広哲弥(1985)を参照されたい。

る。一つは、眼前に広がっている雪のまぶしいことに対する認知的発見のことを即物的反応として発話した現場の表現であり、もう一つは眼前の「まぶしい」状態の主体が何であるかということから、「他ならぬ雪がまぶしい」という意味として、その現象の主体を取り立てて言い表わす、現象の主体に対する認知的発見の形である。即物的反応としての表現は、話し手にとって「まぶしい」ことが「雪」の属性であるか状態であるかと立ちどまって考えるいとまもない。ただ、ありのままを発話時の瞬間的状态として受けとって感覚的に言い表わしているに過ぎない。ところが、「とりたて」の場合は眼前描写の本領である具体的・個別的なものの一時的状態のことを述べるのには変わりはないが、一時的状態の捕え方において、「即物的表現」の場合は動作(うごき)や瞬間的状态として受け取られるのに反して、「とりたて」の場合は動作さえも状態化されて⁵、少なくとも発話の場という制限つきの一時的状態として表わされることになる。

(4) a) 太郎が走って来る。

b) 雨が降る。

(4)の「が」を即物的描写として表現した時と、取り立てて言った時とを比較すると、前者の表現はその動作のうごきを言い表わしているのに対して、後者の場合にはそのうごきの持続性である「一ている」の意味と平行に現われてくる。このような動作の持続相は動作を状態化させているのである。したがって、眼前描写の「とりたて」は(1a)の「雪」を具体的存在物に限るとともに、「まぶしい」は発話の場での状態として言い表わされる。

次に、(1a)の「まぶしい」を「雪」の属性として用いると、「雪」は「まぶしい」という属性を持っている観念的(抽象的)・総称的概念のものになって、眼前での事象を発見する表現となることができなくなる。したがって眼前描写としては用いられなく、もっぱら属性の主体に対する認知的発見という形として取り立てられた表現しかできなくなる。

(1b)の場合もこのような具体的なものか観念的なものかによる二通りの「主題」が可能である。ところが、この場合の具体的な「雪」は(1a)の眼前描写の「とりたて」と同様に、一時的状態である「まぶしい」が瞬間的生起として現われてはすぐ消えてしまうような感じのものではなく、発話の場においての状態の持続相として現われてくることになる。したがって、眼前の具体的「雪」を見ながら「ここの雪はまぶしい」という時がそれであり、観念的(抽象的)「雪」に対しては、すべての「雪」というものを指すところから「雪というものは、まぶしいものである」という意味に用いられる。

また、これとは別に、雪以外の他のことにも意識が向いて、そこにまでも話し手の暗示的表現意図が働いている——「他のことはともかく、雪はまぶしい」という意味としての——「対照」の用法もある。対照の用法も具体的なものか観念的(抽象的)なものかによって二分され得る。

⁵ このような見解は、「状態述語が主語化(総記)を許す」とした久野(1973)と通じると思われる。

このような区別は文頭で言及したように、用法に先立って働く話し手の認知の角度と表現意図によって生じてくる。認知角度⁶とは、客体的事象と発話 (utterance) との間に横たわっている時間と空間の制約条件によって生じる形態認知による表現の視点を用いる。時間的制約条件は、物事の生起が一時的状態か恒常的状态か、完了相であるか未完了相であるか⁷、という叙述内容に関わる。空間的要素はその主体なるものが具体的・個別的なものか、観念的・総称的なものかを選択するようになる⁸。このような時空間的要素は発話の際、いっしょになって互いに選択制限を受ける。例えば、

(5) ねこがねずみを食う。

が眼前描写であれば、「ねこ」は話し手の発話の場で存在している具体的・個別的なものであり、その述語は一時的動作を表わすものであるが、観念的・総称的な「ねこ」とされると習慣的動作とか属性を表わすようになる。

眼前描写としては、「中立叙述」も「とりたて」も可能であるが、観念的なものの属性を表わしている場合には「とりたて」の解釈しかできないということは前に触れた通りだ。この二通りの「とりたて」は具体的現象の主体に対する認知的発見と、抽象的属性の主体に対する認知的発見の二種類の形として区別できる。

一時的状態を表わすものか恒常的状态を表わすものか、という問題も客体的事象それ自体が多面的様相を持っているというのではなく、客体的事象は同一であるが、事象の捕らえ方の違いによってその区別が現われるのだと認められる。

(6) a) 犬が走って来る(コト)。

b) 月が明るい(コト)。

命題 (6a) は一時的現象の動作としか取られないが、(6b) の場合は一時的状態としても恒常的状态としても取られる。(6b) が一時的状態と取られるのは時空間的制約に従う眼前描写での認知

⁶ 形態心理学で説かれている認知角度は、主に空間的概念として接近されている。例えば、透視図法で描かれた正六面体は、一つの認知角度からは立方体と見られるが、別の認知角度からは三つの菱形が結び付いた平面図と見られる(国広, 1989 参照)。この例は客観的には同一の図形(形態)であっても異なった認知の仕方が可能であることを示す。

⁷ 国広(1989)は「完了は「結果状態」を、未完了は「現在進行」を表わす。したがって完了と未完了は中間の状態のない言語以前の認知型である」という仮説を立てた。そして行動の結果状態は「痕跡の表現」につながるとした氏の分析に注目されたい。

⁸ 三上章(1963a: 45)においては、存在するものか、非存在のものかによって「特称命題」(存在命題)と「全称命題」が成り立つとした。奥津敬一郎(1974: 207-16)では、名詞の量的規定はすでに深層構造で決められてあって、それが表層文になると消去されてしまうとした。すなわち、

i) \forall 日本人は小さい \Rightarrow 日本人は小さい。

ii) \exists 日本人は小さい \Rightarrow 日本人は小さい。

(* \forall : 全称量規定詞, \exists : 特称量規定詞)

そして、このような名詞の量的制限は述部の特性によるものであろうと論じている。そうであれば、上例 i) と ii) の「小さい」はどう異なっているのか。ただ、一見して属性と状態として区別し、その特性をいえるかも知れないが、この「小さい」を状態として表わすか、属性として表わすかには、やっぱり話し手の認知活動が認められなくてはならない。

型からであり、恒常的状态(属性)は時空間の制約を超えた観念的認知型からである。それで、このような観念的認知型はその抽象的な属性を目で見られないということから、「とりたて」の解釈をしないと非文になってしまう。これは次の例を参照されたい。

- (7) a) 犬が動物である。(とりたて)
 b) ぼくが社長である。(とりたて)

しかし、このような恒常的状态のもの(もちろん一時的的状态のものも含めて)が従属句として複文の中で実現されると、それは客体的事象の事實的側面を表わす中立叙述となって、命題的意味としての文の素材的内容を表示する機能として働くようになるのであろう。

次に(5)を「は」で入れ替えてみよう。

- (8) ねこはねずみを食う。

この時の「ねこ」も話し手が具体的なものと感じ取るか観念的なものと感じ取るかによって、個別的「ねこ」に対しての一時的動作(前にも指摘したように「一ている」と平行する持続相)と、総称的「ねこ」の習慣的動作や属性として区別され得る。つまりこの点において「が」と「は」には大きな差異はない。

さらに、「が」と「は」には人間の思考の型と認識過程の反映というべきものが見出される。それはちょうど心理哲学で言う、認知⁹→洞察→認識→観念の発達段階と相まっているようにみえる。

- (9) a) 地球が回る(コト)。(事實的事柄: 認知以前)
 b)* 地球が回る。(眼前描写: 認知不可)
 c) 地球が回る。(とりたて: 認知)
 d) 地球は回る。(対照: 洞察)
 e) 地球は回る。(主題: 認識)

(9)の「が」→「は」(a~e)は、認知から認識に至る過程を表わす。(9a)は人間の認知活動以前の事實的事柄を前提することである。(9b)は、特殊な情況——宇宙旅行にでも行って地球を眺めた時——でなければ非文となるもので、眼前に現われている現象の認知は不可能である。(9c)は「回る」ものの主体に焦点が合わされた認知型であり、「とりたて」によって表現が可能である。コペルニクスの地動説の成立の背景はこの説明に適當である。コペルニクスは、太陽とか金星などが地球のまわりを回り、地球はその中心にあると認識されていた当時の天動説に対して、太陽と金星でなく地球が太陽のまわりを回る——ただしくは、地球が回らなければならないという認知的発見に至って、「他ならぬ(太陽か金星でない)地球が回る」という結論に到達したのであろう。

⁹ この場合の認知は、知覚的認知とみる。

(9d) の場合は、「他のものは回るかどうか知らない(論外にする)が、ともかく地球は回る」という意味である。これは地球以外のことについては論外にして、地球にだけ限定させて判断を下す「洞察判断」の形を取っている。(9e) は永久不変の真理として認識されていることを示すもので、「地球は回るものである」と解釈できる。

しかしながら、表現とは認知から認識への発達過程に基づいてだけ表わされるものではない。すでに認識されたものを観念的に用いることの方がもっとも一般的である。強調とか確認の意図はおそらくここから表われてくるのだろう。

次は、(9) の例を認知と表現の対応関係として示したものである。

- (10) a) 地球が回る(コト)。(事実的事柄; 認知以前: 言語以前)
 b)* 地球が回る。(眼前描写; 認知不可: 表現不可)
 c) 地球が回る。(とりたて; 認知: 属性主体のとりたて, 強調)
 d) 地球は回る。(対照; 洞察: 対照判断, 確認)
 e) 地球は回る。(主題; 認識: 品定め判断)

一般的に目で見られる具体的現象は、一回的・瞬間的なものとしか受け取られないが、しだいに習慣的・恒常的なこととして属性化されてゆくことが認められる。また属性化される時は必ず観念的(抽象的)・総称的なものが要求される。このことは前述のとおりである。

しかし、事象自体が一時的な状態、一回的な動作、すなわち一時的現象しか持たない場合がある。それは事象の顕在がただの現象としか認められないので、認識の段階(e)にまでは発展して行かないのである。つまり、一時的現象止まりで属性にはなれないということである。前の(4a)の例からみると、(4a)の一回的動作は少なくともc), d)の段階までは進められる。それはやはり前で論及した「一時的持続相」のためであろうと確信する。

以上の観察に基づいて「認知と表現の相関構造」について普遍性を求めてみよう。

《認知と表現の相関構造》

- (11) a) 枯葉が落ちる(コト)。(事実的事柄; 認知以前: 表現以前)
 ↓
 b) 枯葉が落ちる。(中立叙述; 認知: 即物的眼前描写)
 ↓
 c) 枯葉が落ちる。(① とりたて; 現象の認知: 現象主体のとりたて)
 ↓ ↑ (② とりたて; 属性の認知: 属性主体のとりたて)
 d) 枯葉は落ちる。(① 対照; 現象の洞察: 現象の対照判断)
 ↓ ↑ (② 対照; 属性の洞察: 属性の対照判断)

e) 枯葉は落ちる。(主題；認識：品定め判断)

* (⇒：現象認知および表現の進行方向)
 (⇒：属性認知および表現の進行方向)

2. 「が」と「は」の用法

2-1. 「中立叙述」と「総記」, 「主題」と「対照」——その問題点

久野暉(1973)によれば, 「が」には「中立叙述」と「総記」, 「は」には「主題」と「対照」の二用法があるとしている。

(12) a) 太郎が走って来る。

b) 太郎は走って来る。

つまり, (12a) は「走って来る」のが「太郎」であることを中立的に示しているか, 「太郎だけ」であることを示しているかによって, 「中立叙述」と「総記」とに区別され得るとしている。(12b) は「太郎について言えば, 太郎は走って来る」と解釈すれば「主題」であり, 「太郎は走って来るが, 花子は歩いて来る」のように姉妹項目があると「対照」の用法になるとしている。

井上和子(1983: 34)では, 「が」と「は」の用法区別においては久野に従っているが, 「は」の意味の捕らえ方においては黒田成幸(1964)のほうに立ち, 「他についてでなく, これについて断定する」という本来対照の意味があるとしている。

北原保雄(1984: 80)は, 「は」を「提題」の「は」と規定し, 提題の仕方に二つの方法があるとしている。一つは, 特定しない多数の中から絶対的に取り立てて行なう提題であり, もう一つは特定の有限数の中から相対的に取り立てて行なう提題であるとする。それで前者を「主題」, 後者を「対照」と呼んでいる。とにかく両者を「取り立て」という点では根を一つにしていると考えた。(傍点は筆者が付けたものである)

「主題」と「対照」の「は」が「取り立て」によったものかどうかという問題は, 助詞分類上の問題にも関わって, 奥津・沼田他(1986)は対照の「は」だけを係助詞の中から抜き出して「とりたて詞」として片付けている。

では, 「が」と「は」の用法区別を久野に基づいて, 述語と先行名詞句との関連から整理してみよう¹⁰。

¹⁰ (13) の表は, 久野(1973), 井上(1983), 北原(1984: 117)の分析を総合して筆者が作成したものである。「が」の用法区別において, 久野は述語の特性だけを論じているが, 井上では先行名詞句との関連も扱っている。ところが久野(1973: 32)で, 総記の述語特性をあいまい(?)に表現していたため, 井上(1983: 33)では習慣的動作, 恒常的状态だけが総記の解釈になることとして扱った。上の(13)は, この部分においては北原に従っている。

う。つまり、「(象の)鼻」が「長い」の主体になり、「懐しい」の主体は「(私の)母」となる¹⁸。

これの構文的分析は、

- (17) a) 象は鼻が長い。
 $\begin{array}{c} \text{—————} \\ \text{—————} \\ \text{—————} \end{array}$
 b) 私は母が懐しい。
 $\begin{array}{c} \text{—————} \\ \text{—————} \\ \text{—————} \end{array}$
- (18) a) 象は鼻が長い。
 $\begin{array}{c} \text{—————} \\ \text{—————} \\ \text{—————} \end{array}$
 b) 私は母が懐しい。
 $\begin{array}{c} \text{—————} \\ \text{—————} \\ \text{—————} \end{array}$

となり、(17)は「中立叙述」、(18)は「総記」として現われる。このような例をもう一つ引いてみる。

- (19) a) 空が青い。
 $\begin{array}{c} \text{—————} \\ \text{—————} \\ \text{—————} \end{array}$
 b) 空が青い。
 $\begin{array}{c} \text{—————} \\ \text{—————} \\ \text{—————} \end{array}$

(19a)は眼前描写の「中立叙述」である。眼前にある具体的な「空」の状態が「青い」ということを中立的に、さらに即物的に描写していることを示す。これを、

- (20) 今日、空が青い。
 $\begin{array}{c} \text{—————} \\ \text{—————} \\ \text{—————} \end{array}$

としても「中立叙述」となり得る。すなわち、(20)の「空が青い」というのは「今日」における属性か状態を表わす。

(19b)の場合の「空」は具体的なものと取っても観念的なものと取ってもよい。この時の「空」は「青い」の主体として取り立てられたもので「総記」の解釈になる。同時に具体的「空」には一時的状態の「青い」が、観念的な「空」には恒常的状态(属性)の「青い」が対応していく。これを(20)のような構文の中に取り込むと、

- (21) 今日、空が青い。
 $\begin{array}{c} \text{—————} \\ \text{—————} \\ \text{—————} \end{array}$

(21)の「青い」は「今日」における「空」の状態だけを表わすようになるので、観念的「空」を取り立ててその属性が「青い」という意味としての「総記」の解釈は不可能になる。もし、こ

¹⁸ これは、時枝誠記(1914)以来いわゆる対象語とされたが、北原(1984:87)では「主格」であるとした。つまり、「懐しい」は「母」の属性を表現したもので、「私」にとってという制限付きの属性であり、この時の「私」は主観的主格、「母」は客観的主格であるとした。

れを,

(22) 岐阜は、空が青い。
 ــــــــــــــــ→ト
 ــــــــــــــــ→←

とすれば、「岐阜」においての「空」は、「青い」という属性を持っていることになるので、観念的「空」が取り立てられた「総記」となり得る。

このように「が」の使い方は、用法に先立って働く人間の認知活動を認めることによってその区別が可能になってくる。つまり、時空間的制約があるかないかによってその使い方が峻別されなければならない。

次に、「は」について検討してみよう。「は」の問題点は、その用法を「主題」と「対照」として両立させたところにあると思う。

(23) ねこはねずみを食うが、へびは蛙を食う。

久野では、(23)の「は」は「対照」の用法であり、「ねこ」と「へび」は対照されているとする。しかし単文の中での「ねこ」と「へび」は各々「主題」としての働きをしていることが認められる。つまり「主題」と「対照」とは両立できる個別のものではなく、「主題」でありながら「対照」の働きも持つものである¹⁴。したがって、本稿では「主題」の下位分類で、「品定め主題」と「対照主題」とに分けている (p. 133 参照)。

「は」について考えるべきもう一つの点は、述語との関わりである。久野は、「が」の用法は述語の性格によるものとして区別しているが、「は」にはその分布の制約がないと扱われている ((13)を参照)。一般に「が」は動詞文に多く、「は」は形容詞文と名詞文に多いということは周知の事実である。この事実は「は」に従う述語が恒常的状态とか属性を表わすのによりふさわしいということを表わすものである。

2-2. 認知と表現の観点から見た用法

今まで、「が」と「は」の使い分けを、話し手の認知活動と表現意図という観点から述べてきた。これを整理して次のようにその用法分類を試みたい。

《「が」と「は」の用法》

「が」: i. 中立叙述

1. 即物的描写
2. 事実的事柄

ii. とりたて

¹⁴ このような見方は、Kuroda(1964)、此島正年(1966)、井上(1983)などですでに指摘があった。

1. 現象主体のとりたて
2. 属性主体のとりたて

「は」: iii. 品定め主題

1. 現象判断
2. 属性判断

iv. 不問の対照主題

1. 現象の対照判断
2. 属性の対照判断

v. 表別の対照主題

1. 現象の対照判断
2. 属性の対照判断

《先行名詞句と述語との共起相》

i-1. 即物的描写

先行名詞句: 具体的・個別的なもの

述語: 動作, 状態, 存在の瞬間的なこと

- (24) a) 雨が降る。(「ア, 雨だ!」と同様)
b) はえがいる。(「ア, はえだ!」と同様)
c) あなたがほしい。

i-2. 事実的事柄

先行名詞句: 制約がない

述語: 制約がない

- (25) a) 地球が回るという事実は, コペルニクスによって主張された。
b) 窓の中から犬が走ってくるのを見ていた。
c) ぼくは子供の時から鯨が動物であることを知っていた。

ii-1. 現象主体のとりたて

先行名詞句: 具体的・個別的なもの

述語: 動作, 状態, 存在の一時的持続相

- (26) a) (他ならぬ)雨が降っている。
b) (他ならぬ)歯がいたい。

ii-2. 属性主体のとりたて

先行名詞句: 観念的(抽象的)・総称的なもの

述語: 習慣的動作, 恒常的状态

- (27) a) (他ならぬ)地球が回る。
 b) (他ならぬ)鯨が動物だ。
 c) (他ならぬ)私が学生だ。

iii-1. 現象判断(品定め主題)

先行名詞句: 具体的・個別的なもの

述語: 動作, 状態, 存在の一時的持続相

- (28) a) ねこは暗い倉庫の中でねずみを食っている。
 b) 雨は今も降っている。
 c) 和子は私に会いに岐阜から飛んで来た。(結果状態の一時的持続相)

iii-2. 属性判断(品定め主題)

先行名詞句: 観念的(抽象的)・総称的なもの

述語: 習慣的動作, 恒常的状态

- (29) a) 地球は回る(ものである)。
 b) 鯨は動物である。
 c) 私は学生である¹⁵。

iv-1. 現象の対照判断(不問の対照主題)

先行名詞句: 具体的・個別的なもの

述語: 動作, 状態, 存在の一時的持続相

- (30) a) (他のものは降っているかどうか知らないが, とにかく)雨は降っている。
 b) (他の人は走って来るかどうか知らないが, とにかく)太郎は走って来る。

iv-2. 属性の対照判断(不問の対照主題)

先行名詞句: 観念的(抽象的)・総称的なもの

述語: 習慣的動作, 恒常的状态

- (31) a) (他のものは回るかどうか知らないが, とにかく)地球は回る。
 b) (他は動物であるかどうか知らないが, とにかく)鯨は動物である。

v-1. 現象の対照判断(表別の対照主題)

¹⁵ この時の「私」は、「私の身分」を表わす抽象的なものである。例えば、

- i) a) 雪は白い。
 b) 犬は動物である。

は、

- ii) a) 雪は色が白い。
 b) 犬は属性が動物である。

として、「雪」と「犬」は、「雪の色」と「犬の属性」のことを表わす。

先行名詞句： 具体的・個別的なもの

述語： 動作，状態，存在の一時的持続相¹⁶

- (32) a) 太郎は走って来るが，花子は歩いて来る。
b) 雨は降っているが，風は吹いていない。

v-2. 属性の対照判断(表別の対照主題)

先行名詞句： 観念的(抽象的)・総称的なもの

述語： 習慣的動作，恒常的状态

- (33) a) 人生は短く，芸術は長し。
b) 三田村さんは社長であるが，ぼくは学生である。

上記の分類でもっとも目立つのは、「は」の用法である。「は」には、一般に「主題」と「対照」の用法があるとされているが、「対照」とは「主題」の中に含まれているものと認められる。したがって「は」の基本的用法を「主題」とし、この「主題」を「品定め」と「対照」と分け、さらに「対照」を「不問の対照」と「表別の対照」とに峻別して、「品定め主題」、「不問の対照主題」、「表別の対照主題」の三用法があるとする¹⁷。

「品定め」という用語は、佐久間鼎(1983)では「物事の性質や状態を述べたり、判断をいいあらわしたりするという役割をあてがわれる」と定義して、それはほぼ名詞文、形容詞文に当たるとしている¹⁸。本稿での「品定め主題」には名詞文、形容詞文の他、動詞文(現象判断)も入れるが、この場合の動詞述語は状態化されているので、佐久間の「品定め文」と大きく異なる点はないように思われる。

「不問」¹⁹は、「は」の対照作用の本領で、主題以外他のものについては判断を下すのを言外にする形を指す。

「表別」とは、言外扱いされた「不問の対照主題」とは違って、[Xは α , Yは β]という文型を取りながら、二つの相関句が対句ないし対照の性格を表わすことをいう。この二つの項目は、叙述内容が反意(antonymy)、相対(contrastive)、否定(negative)の概念を表わすことによって対立の様相として表別されている²⁰。すなわち、「表別の対照主題」が「不問の対照主題」と異なる

¹⁶ 「現象主体のとりたて」と「現象判断の主題」の場合、その述語が一時的ではあるが持続相を表わすようになるのは、おそらく客体的事象と話し手の密着度に関係があるらしい。つまり即物的描写の場合は事象に対しての話し手の即物的反応のため、それが瞬間的現われとしかされないが、持続相の場合は事象と話し手とに、ある程度の距離があってこそその発話であるので、事象の過程が話し手の視野の中に入れるようになる。

¹⁷ 佐久間鼎(1983)の「特説」と「分説」は、本稿での「不問の対照主題」と「表別の対照主題」に対応できる。

¹⁸ 金田一春彦，林大他(1988: 149)，『日本語百科大辞典』，大修館書店。

¹⁹ 「は」の不問性は、三上章(1963a: 116)によって指摘された。

²⁰ 洪思満(1985: 98-119)，「表別斗極端例示の意味様相」，『国語語彙意味研究』，学文社。

る点は、「不問の対照主題」では言外扱いされていたものの中から対照項目が設定され、その二つの項目を反意と否定などによって比較対照させたところにある(詳しくは後述する)。

したがって、久野(1973: 30)の次の例は「対照」(表別の対照主題)の文と認められにくいところがある。

(34) 大勢の人はパーティーにきましたが、面白い人は一人もいませんでした。

(34)の「大勢の人」と「面白い人」とは対立関係にあるより意味上の包含関係にある。すなわち、

(35) 大勢の人はパーティーにきましたが、その中で面白い人は一人もいませんでした。

という解釈がただしであるろう。また、二項目の叙述内容も反意、相対、否定などの意味関係でない。つまり「来ている人の中で、面白い人の存在がない」ということであり、

(36)* 大勢の人はパーティーにきましたが、面白い人はパーティーに来ませんでした。

(36)の意味ではない。おそらくこれを対照文として見たのは次のような情況からであろう。

まず、この文の対立様相はパーティーに「来た人」と「来なかった人」との対立が先立つ。そして「大勢の人」の中に当然存在しているだろうと期待されていた「面白い人」は、「来た人」のグループの「大勢の人」の中には属さず、「来なかった人」のグループに入ることによって、やっと二項目の表別がおもてに現われてくるという手順をふむ。

これを図示すると、次のようである。

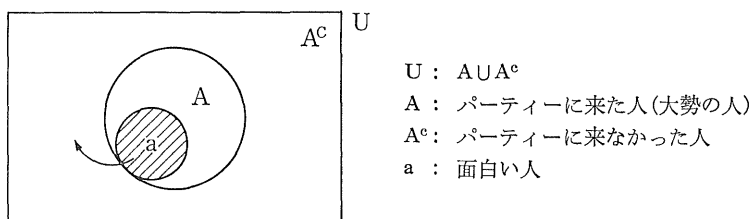


図 1

すなわち、 $A \supset a$ でなく $A^c \supset a$ になってこそ、はじめて A と a との対立は成立つ。

このような表別の対立様相は、主に叙述内容の対立によって相関句である二項目が対照されることになるので、この場合の「は」はそれ自体が対照機能を持っているか否かという問題にぶつかる。この問題は次の章で論議を進めたい。

3. 意味の背景と形態

3-1. 「は」の意味——その背景と形態

(37) 犬は動物である。

(37) は普通、二通りの解釈で説明されている。一つは、犬が動物の中に包含されている、いわゆる包摂判断の解釈と、もう一つは、犬の属性が動物であるという含意関係の属性判断の解釈である。前者を外延、後者を内包という。三上章(1963a: 40)ではこのような意味関係を次の図2, 3で表わしてみせた。

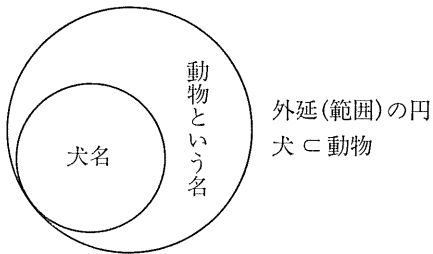


図 2

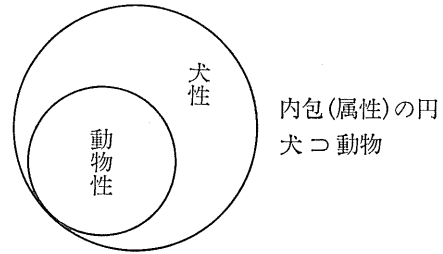


図 3

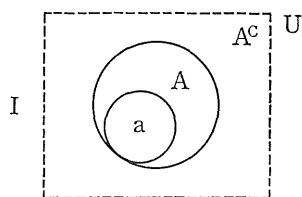
しかし、このような解釈は「犬」と「動物」との関係から生じてくる当然の意味関係にすぎない。つまり、「犬」と「動物」との論理的関係を連結させている「は」の意味機能に対しての直接的な論議にまでは立ち入っていないということである。

「は」の主題としての意味用法は、話題を「限定」させているところから生じてくる。さらに「対照主題」の場合は話題として限定されたものを特別に取り立てることによって他と「区別」されているという意識が生じてくる。そして他との比較対照が暗示的に行なわれるようになる。この時「限定」だけの働きをする「は」のほうが「品定め主題」に当たり、限定させていることによって相対的に「区別」の意味を持つ、取り立ての「は」は「対照主題」となる。

「品定め主題」と「対照主題」とは、その表現意図が異なっていることが分かる。「品定め主題」には限定された話題 (Topic) だけを観察して判断 (comment) を下す、いわば「内部向け」の働きがある。反面、「対照主題」の場合は限定された話題 (内部) 以外のことにも意識が向いて、暗示的な比較対照が行なわれるが、それについての判断は言外にし、ただ区別されているぐらいで止まって、話題に対してだけ判断を下す——「外部向け痕跡」の働きがみられる。

このような「は」の二つの働きを(37)の例に戻して適用してみると次頁(図4-7)のようになろう。

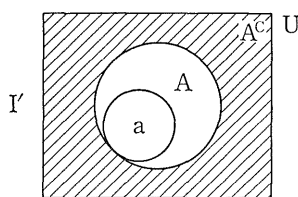
I と I' は内包の枠、II と II' は外延の枠を示す。I と I', II と II' のペアは同一様相の



内部向けの判断
品定め主題(属性判断文)
A;犬, a;動物(性)
 $A \supset a$ (内包)
 $\Rightarrow A$ はaである

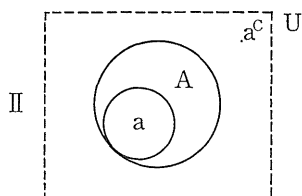
図 4

とりたて



外部向け痕跡の判断
対照主題(属性判断文)
A;犬, a;動物(性)
 $A \supset a$ (内包)
 $\Rightarrow (A^c$ はとにかく) Aはaである

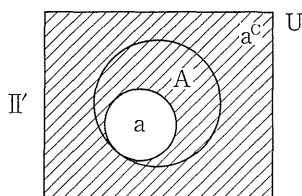
図 5



内部向けの範囲判断
品定め主題(論理的関係の判断文)
a;犬, A;動物
 $a \subset A$ (外延)
 $\Rightarrow a$ はAである

図 6

とりたて



外部向け痕跡の範囲判断
対照主題(論理的関係の判断文)
a;犬, A;動物
 $a \subset A$ (外延)
 $\Rightarrow (a^c$ はとにかく) aはAである

図 7

※ ;外部向け痕跡(暗示的表現意図), ;背景認知以前, ;背景認知

異面で、これらは認知角度による背景認知の仕方と表現意図によって現われる。言い換えれば、「とりたて」による「区別」の意識から生じている両面性である。そして I と II においてその背景である A^c と a^c は、ただそれが背景として存在していることを示すだけで、背景が話し手の認知の中に入っていることを示すわけではない。しかし、I' と II' の場合はすでに話し手の認知の中に A^c と a^c が入って、それに対しては暗示的表現意図として働くことになる。したがって、I と II は内部向けの「品定め主題」を、I' と II' は外部向け痕跡の「対照主題」を示すものである。

次は、「カフェでのピエールの不在」²¹ を「存在」とともに論議を進めてみる。

²¹ サルトルの『存在と無』での挿話であるが、ここでは黒田(1976: 146)から引用した。

- (38) a) ピエールはいる。
 b) ピエールはいない。

(38) は現象判断を表わす「対照主題」と解されるものである。この時「ピエール」の存在は、カフェに存在するすべての物事がその背景となって、その中からピエールの存在が背景の前景(形態)として現われてくる。この場合の「は」の働きは「背景」(カフェのすべての物事)と「形態」(ピエールの存在)とを区別させてくれる。

ところが、「不在」の場合ではどうか。不在の確認は、存在の確認よりもっと積極的な背景認知をやらなければならないらしい。次の図を参照されたい。

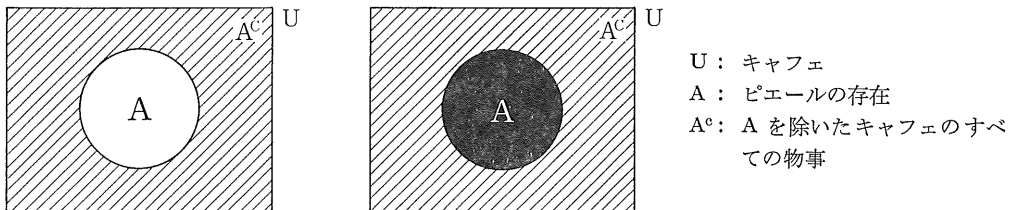


図 8 (存在の確認)

図 9 (不在の確認)

図 8 は U の中から A の存在が発見されているが、それは A^c との区別によって現われてくる。図 9 の場合は、A^c と U が一体化してしまうので A の存在は「無」という形として現われてくる。

ピエールの「存在」と「不在」が「カフェ」という全体背景をとるようになるのは、やはりコンテキストに依存されてであろうが、それはピエールがそこにいるだろうと期待されていたところから生じてくるのであろう。したがって、A^c は A の「背景」として存在し、A は前景の「形態」となる。

3-2. 「が」の意味——その背景と形態

「が」の働きは主に文の素材内容の表示機能にある。言いなおせば、客体的事象に対する話し手の認知事項を客観的に言い表わすのに用いられる。反面「は」の場合は、話し手の表現意図に従って主観的表現をするのに用いられる。つまり、「が」と「は」は「客観的描写」と「主観的描写」として大別され得る。

客観的描写に用いられる中立叙述の「が」は、現象をそのまま「指示」して中立的に言い表わす働きをする。「中立的」というのは「現象」(叙述語)と「主体」との対立が現われてなく、つまり「主体」も「現象」の中に含まれてただ論理的関係だけを示すことをいう。ところが「とりたて」の「が」の場合は、「現象」の「主体」を認知的発見によって取り立てて言い表わすので、

その主体は他のものから「選択指定」されるとともに、「現象」(叙述語)は「主体」と対立するような様相を帯びる。

一般に「客観的描写文」は、「主観的描写文」の中での素材内容として用いられるか、そうでなければ、時空間の中での物事の生起を言い表わす時に使われる。

ここで、「は」文の中で現われている「が」文の様相を、久野(1973: 38)の例から引いて説明する。

(39) a) このクラスは男性がよくできる。

b) このクラスは太郎がよくできる。

(40) a) 日本は男性が短命である。

b) 日本は東京が住みよい。

(39),(40)での「が」文は、話題として限定された「このクラス」、「日本」という制限の中に現われてくる客観的事実をいう。この客観的事実の「が」文は「は」の働き——品定め(内部向け)か、対照(外部向け痕跡)か——によって、さらに「が」自身の用法にも制約が伴われてくる。

(41) a) このクラスは男性がよくできる。 (対照主題 <外部向け痕跡の判断>, 中立叙述)

—————><—————

b) このクラスは男性がよくできる。 (品定め主題 <内部向けの判断>, とりたて)

—————>|—————

(42) a)* このクラスは太郎がよくできる。 (対照主題 <外部向け痕跡の判断>, 中立叙述)

—————><—————

b) このクラスは太郎がよくできる。 (品定め主題 <内部向けの判断>, とりたて)

—————>|—————

(43) a) 日本は男性が短命である。 (対照主題 <外部向け痕跡の判断>, 中立叙述)

—————><—————

b) 日本は男性が短命である。 (品定め主題 <内部向けの判断>, とりたて)

—————>|—————

(44) a)* 日本は東京が住みよい。 (対照主題 <外部向け痕跡の判断>, 中立叙述)

—————><—————

b) 日本は東京が住みよい。 (品定め主題 <内部向けの判断>, とりたて)

—————>|—————

(41),(43)のa)は、「このクラス」と「他のクラス」、「日本」と「他の国」との比較対照を通じて「男性がよくできる」、「男性が短命である」ということが客観的事実として認められる。ところが(42),(44)のa)には、対照の対象である「他のクラス」と「他の国」の中から「太郎がよくできる」、「東京が住みよい」という比較される内容が見出されるはずがないので非文になる。

(41)~(44)のb)の場合は、「このクラス」、「日本」の内部だけを観察して、その中から「よく

できる」, 「短命である」, 「住みよい」の主体が見出されてくる。その主体の発見は「女性」でない「男性」, 日本の中での「他の所」でない「東京」という「選択指定」によって表わされる。

つまり, 「品定め主題」は内部向けの働きによって叙述の主体が他のあらゆる可能性のある要素から選択指定される「とりたて」の「が」と呼応するが, 「対照主題」は外部の事実との暗示的比較によって客観的に判断される「中立叙述」と呼応する。

次に, 前の(38)の例を「が」に入れ替えてみよう。

- (45) a) ピエールがいる。
b) ピエールがいない。

上の発話は空間的背景(ここではカフェ)が設定されていなければ不自然になる。すなわち, (45)は時空間的背景の中で現われているピエールの「存在」と「不在」のことを眼前にみえる前景(形態)だけを指示して, その場で言い表わした「中立叙述」である。したがって, 客体的には「カフェ」という背景の中での発話であるが, 話し手にはその背景についての認知はなされていない。これをわざわざ「カフェ」という背景の中に入れると,

- (46) a) カフェには, ピエールがいる。
b) カフェには, ピエールがいない。

(46)は「カフェ」の内部だけを観察して, その中にピエールの存在か, 不在かをみていく「とりたて」の解釈しかできなくなる。これは前の(42)と(44)のa)のように, 同一人が二ヵ所で同時に存在することは不可能であることを示す。したがって「カフェ以外の他の所にはピエールがいるかどうか知らないが, とにかくカフェにはピエールがいる」という「不問の対照主題」の中での「中立叙述」は成り立たない。しかしこれを「表別の対照主題」の文で表わすと, 「中立叙述」となり得る。

- (47) a) カフェにはピエールがいるが, 学校にはピエールがいない。
b) カフェにはピエールがいないが, 学校にはピエールがいる。

(47)の場合は, 「否定」の概念による表別様相として「カフェ」と「学校」とが対照されている。この時の「が」は「中立叙述」の解釈になる。

ところが, 次のような「表別の対照主題」の文の中での「が」は「とりたて」としか解されない。

- (48) a) このクラスは太郎がよくできるが, あのクラスは花子がよくできる。
b) 日本は東京が住みよいが, 韓国はソウルが住みよい。

(48)は, 単文の中でも「が」は「とりたて」としか受け取れないものである。この点から推論してみると, (48)の文は, 「品定め主題」と「とりたて」の形式を持つ二つの単文が接続詞「が」によって対立されてはじめて, 「表別の対照主題」として成り立たれるようである。ところが次の

ような文は、(48)とは情況が違っている。

(49) a) このクラスは男性がよくできるが、あのクラスは男性がよくできない。

b) このクラスは男性がまじめであるが、あのクラスは男性がなまけものである。

(49)の各々の単文は、「中立叙述」とも「とりたて」とも解釈できるが、「表別の対照主題」の文の中では「中立叙述」としか受け取れない。このような表別の対立様相は、「否定」、「反意」による主題の有標性 (marked) によって現われてくることが認められる。また、次のような文も考えられ得る。

(50) このクラスは男性がまじめであり、あのクラスは女性がなまけものである。

この文は「とりたて」としても「中立叙述」としても可能であるようだ。つまり二つの単文の組み合わせが、「品定め主題」と「とりたて」であるか、「不問の対照主題」と「中立叙述」であるかによっているらしい。

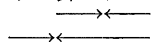
上記の検討からみると、「は」の対照 (contrast) の意味機能は前の早急な結論のように接続詞「が」によるものでなく、「は」それ自体が持っている特性であることが分かる。品定め主題の「は」は「とりたて」による相対概念を対立させているところから、対照主題は「は」の有標性による否定、反意の概念を対立させているところから、表別の対立様相は現われてくるのであろうと思う。

以上をまとめると、「～は～が」文中に現われる「が」は、「は」の働きによってその用法が制限されている。すなわち、「品定め主題」は必ず「とりたて」の「が」を含めるが、「不問の対照主題」は「中立叙述」だけを含む。ところが「表別の対照主題」の場合は「とりたて」も「中立叙述」も含めることができる。

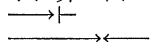
これを図示すれば次頁(図10-14)のようになる。

「～は～が」文に対しての上記の考察は、三上章(1972a: 138)の「全体」—「部分」(部面)とも通じるところがある²²。

(51) a) 象は鼻が長い。(対照主題, 中立叙述)

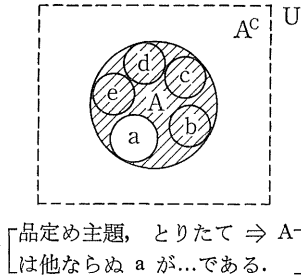


b) 象は鼻が長い。(品定め主題, とりたて)



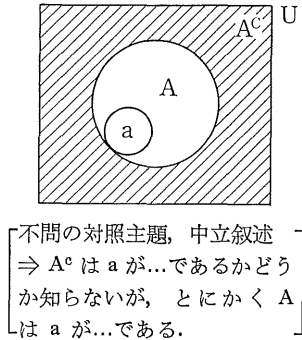
(51a)は、「他の動物は鼻が長いかどうか知らないが、とにかく象は鼻が長い」という意味で、「象」に対して「鼻が長い」の部分が述語であるが、(51b)の場合は「象というものは他ならぬ(その)鼻が長い」として「長い」の主体が他ならぬ「(象の)鼻」であるとしている。

²² 本稿でいう「～は～が」文は「背景」と「形態」の関係である。「背景」は「形態」が現われる場所をいい、「形態」はこのような背景の制限の中で現われる。したがって、動詞文においてその背景は時空間的要素になるが、名詞文(形容詞文)においては「全体—部分(部面)」の形となりやすい。



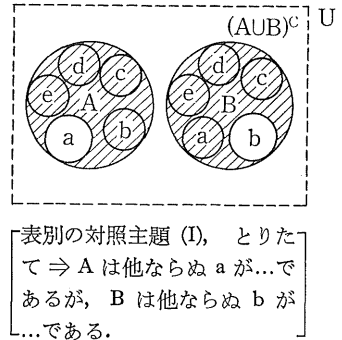
[品定め主題, とりたて ⇒ A]
は他ならぬ a が...である.

図 10



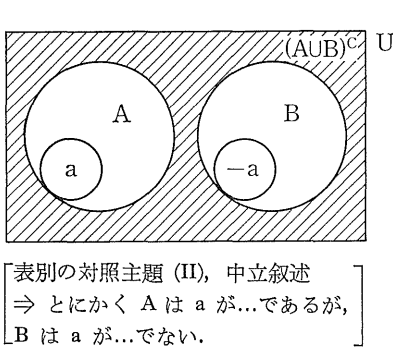
[不問の対照主題, 中立叙述
⇒ A° は a が...であるかどうか
知らないが, とにかく A
は a が...である.]

図 11



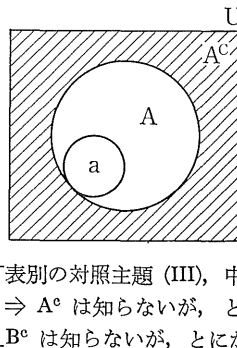
[表別の対照主題 (I), とりた
て ⇒ A は他ならぬ a が...で
あるが, B は他ならぬ b が
...である.]

図 12



[表別の対照主題 (II), 中立叙述
⇒ とにかく A は a が...であるが,
B は a が...でない.]

図 13



[表別の対照主題 (III), 中立叙述
⇒ A° は知らないが, とにかく A は a が...であり,
B° は知らないが, とにかく B は b が...である.]

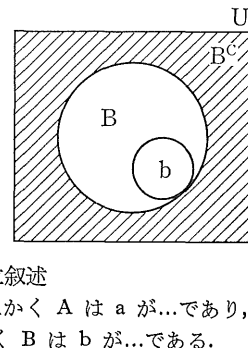


図 14

ところが、このような「～は～が」文も常に「全体は部分が…」という外形のみを取っているのではない。

- (52) a) 鼻は, 象が長い.
- b) 頭は, 太郎が悪い.

上の例の「が」は「中立叙述」ではあり得ない。したがって、この「は」は「品定め主題」として内部向けの判断を下していることになる。再び、(51)の例をみていただきたい。(51a)の「象」は「他の動物」と対照されて、すべての象——観念的、総称的なもの——を指すようになるが、(51b)の場合は具体的、個別的なものも、観念的、総称的なものも指し得る。つまり、(51b)「この象は、他ならぬ鼻が長い」でも「象というものは、他ならぬ鼻が長い」でも可能である。これを(52)の例に当てはめてみると、

- (53) a)* この鼻は, 他ならぬ象が長い.
- b)* この頭は, 他ならぬ太郎が悪い.

具体的、個別的な(53)の「鼻」と「頭」のことは非文になってしまう。しかし、

(54) a) 鼻というものについて言えば、他ならぬ象(の鼻)が長い。

b) 頭というものについて言えば、他ならぬ太郎(の頭)が悪い。

のように観念的、総称的なものになると、意味的にも文法的に成立して、すべての「鼻」と「頭」というものの中での「象の鼻」と「太郎の頭」という「全体」―「部分」(部面)の説明が成り立つ。

このようにして、いわゆる「うなぎ文」の説明も可能になる。

(55) ぼくはうなぎだ。

という文は、次の文から括弧の部分が省略されて成り立つ²³。

(56) ぼくは、(食べたいのが)うなぎだ。

「うなぎ文」において「ぼくは」は「対照主題」でなければならない²⁴。そして「が」は「中立叙述」として働く。つまり「他の人は食べたいのがうなぎかどうか知らないが、とにかくぼくは(食べたいのが)うなぎだ」と解釈できる省略文である。もし、これを奥津説に従って説明すると、「他の人はうなぎが食べたいかどうか知らないが、とにかくぼくは(うなぎが)食べたい」として、むしろ「ぼくは食べたい」になってしまう。

文の中での素材内容を表わす「が」は、また常に「は」の中にだけつつまれて用いられるものではない。

(57) a) 今(or あそこに), 太郎が走ってくる。

b) 今(or 東京に), 雨が降っている。

のような眼前描写の場合は、時空間の制約の中でだけ具体的な物事の現象を描写することができるので、時空間は物事の現象を前景(形態)とする背景の役割をする。この時の限定された時空間的要素は「主題」として働きうる。

これ以外に、いわゆる重主語文とされている「～が～が～」文もある。

(58) a) 東京が人口が多い。

b) 文明国が男性が平均寿命が短い。

この文は、最初の「が」だけが「とりたて」になって、残りの「が」はみんな「中立叙述」の解釈を受ける。つまり「東京」と「文明国」が主語の役割をして、残りの部分は述語として主語の属性を述べているものである。意味機能の面からみても「とりたて」の「が」は「選択指定」

²³ 「うなぎ文」説には大きく、① 述語代用説(奥津)、② 分裂文説(北原)、③ コピュラ説(池上)、④ のだ説(Martin)、⑤ 省略文説(堀川)などが上げられるが、本稿で言う省略とは必ず「対照主題」の中での「中立叙述」のペアになってこそ可能になるので、堀川の省略文説とは根本的に違っている。

²⁴ 実在食堂などでうなぎを注文する場合、わざわざ「ぼくは」として取り立てて言う必要がない。ただ「うなぎだ」としてもすむわけであるが、わざわざ言う時は語用論的次元のコンテクストが必要である。そのコンテクストでは必ず他人と区別したい状況があるはずである。詳しくは、久野(1978: 91-2)を参照すること。強調の目的でないと、一人称、二人称は不必要であるとした小山敦子(1966: 119)もある。

の働きをするので、「限定」の働きをする「主題」の座に坐り得るだろう²⁵。したがって「主題」や「主語」とは、何か特別に定められているところから許容されるようになるのであろう。

4. ま と め

以上、本稿では、言語以前の人間の内部的認知活動を認めた上で、発話時のその表現を対象にして「が」と「は」の用法、意味、意味の背景と形態などを分析・記述することにつとめた。

これを次のようにまとめて結論づけたい。

1. 「が」と「は」を用いる発話は、客体的事象が時空間の制約の中から生じているか否かによって、名詞句と述語との関係が「具体的、個別的なもの」の「一時的状態、動作」か、「観念的(抽象的)、総称的なもの」の「恒常的状态、属性」かの共起相を表わす。

そして「が」には、眼前の事象をありのまま即物的に描写する場合と、事象の主体が何かに焦点が向いている場合があるが、「は」は主に、話し手の表現意図に関わっている。これを客観的描写と主観的描写として区別した。

2. 「が」→「は」への言い換えの展開は、中立叙述(即物的描写)→とりたて→対照主題→品定め主題の順と、心理哲学でいう認知→洞察→認識の発達過程と相まっている。そして確認と強調の表現は、認識の後の観念によって成り立ち得るようである。

3. 用法区別は、「が」は、1) 中立叙述; 即物的描写, 事実的事柄, 2) とりたて; 現象主体のとりたて, 属性主体のとりたて, として分類した。「は」はその本領が「主題」であることから、1) 品定め主題, 2) 不問の対照主題, 3) 表別の対照主題と分けて、それぞれ現象判断と属性判断があるとした。

品定め主題には「内部向け」の、不問の対照主題には「外部向け痕跡」の二つの働きが認められる。また必ず「品定め主題」と「とりたて」、「不問の対照主題」と「中立叙述」の共起相を表

²⁵ 三上章(1972c: 103-7)で、「が」を「陰題」と「無題」と区別したのは、「とりたて(総記)」に「主題」の要素があることを示しているようである。井上(1983: 38)では、「とりたて(総記)は主題と通じる」と言及している。ところが、厳密に言えば、「とりたて(総記)」は「対照主題」と通じるのである。

i) a 象は鼻が長い。(対照主題, 中立叙述)

b 象が鼻が長い。(とりたて, 中立叙述)

ia), ib) は共に、「鼻が長い」が「象」の述語として働く共通点を持つ。したがって、

ii) a) 日本は東京が住みよい。(品定め主題, とりたて)

b)* 日本が東京が住みよい。(とりたて, 中立叙述)

ia) と ii b) の「品定め主題」と「とりたて」は通じないばかりでなく、ii b) が非文となる。それは ia) を対照主題として解釈した時非文になると通じる。

わす。表別の対照主題の場合は、「とりたて」と「中立叙述」の両方とも呼応する。この時の表別様相は「とりたて」による相対対立の様相と、主題の有標性 (marked) による「反意」と「否定」の対立様相として現われる。

4. 「は」の意味とその背景と形態は、品定め主題の場合は、「は」の「限定」の意味機能と「内部向け」の働きによって、主題に対しての内部的観察による判断が意味の形態として現われる。この時、主題以外のもの(背景)は話し手の意識の中に入っていない認知以前の状態のままにある。しかし不問の対照主題の場合は、その形態(前景)と区別されて、すでに話し手の意識の中に背景認知の形が入っている。これは「区別」の意味機能と「外部向け痕跡」の働きによってであり、このような「外部向け痕跡」的表現からみられる背景的要素は話し手の認知の中で暗示的表現意図の姿を残している。

5. 「が」文は主に、「は」文の中につつまれて用いられる。この場合の「は」は「が」の意味の形態(前景)が現われ得る場所としての背景の役割をする。「は」につつまれていない即物的描写の場合は、時空間の制約の中での物事の生起を言い表わすものなので、時空間的要素が、その形態が持つ背景となり、同時に「は」のような「主題」の役割もする。

参 考 文 献

- 青木伶子(1968)「活用形と陳述——係助詞「は」との関わりに於いて」、『国語学』, 72集.
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論』, 大修館書店.
- (1983)「テキストとテキストの構造」, 『談話の研究と教育 I』, 日本語教育指導参考書 11, 国立国語研究所.
- 井上和子(1983)「文一文法と談話文法の接点」, 『言語研究』84号, 日本語学会.
- 奥津敬一郎(1974)『生成日本語文法——名詞句の構造』, 大修館書店.
- (1983)『「ぼくはうなぎだ」の文法——ダとノ』, くろしお出版.
- 奥津敬一郎, 沼田善子他(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』, 凡人社.
- 尾上圭介(1973)「文核と結文の枠——「ハ」と「ガ」の用法をめぐって」, 『言語研究』63号, 日本語学会.
- (1981)「「象は鼻が長い」と「ぼくはうなぎだ」」, 『月刊言語』Vol. 10, 大修館書店.
- 小山敦子(1966)「「の」「が」「は」の使い分けについて——展成文法理論の日本語への適用」, 『国語学』66集.
- 北原保雄(1984)『日本語文法の焦点』, 教育出版.
- 金田一春彦, 林大他(1988)『日本語百科大辞典』, p. 146, 大修館書店.
- 国広哲弥(1985)「言語と概念」, 『東京大学言語論集 '85』.
- (1989)「多義と認知」, 『日本エドワード・サピア協会ニューズ・レター』第3号.
- 久野 暲(1973)『日本文法研究』, 大修館書店.
- (1978)『談話の文法』, 大修館書店.
- 黒田成幸(1976)「日本語の論理・思考」, 『岩波講座日本語 I——日本語と国語学』, pp. 141-176, 岩波書店.
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究——助詞史素描』, 桜楓社.
- 佐久間鼎(1983)『現代日本語法の研究』, くろしお出版.

- 時枝誠記 (1914) 『国語学原論』, 岩波書店.
- 橋本萬太郎 (1968) 「総主語」「小主語」の統辞法, 『国語学』74集.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法——日本語文法序説』, くろしお出版.
- 三上 章 (1963a) 『日本語の論理』, くろしお出版.
- (1963b) 『日本語の構造』, くろしお出版.
- (1969) 『象は鼻が長い』, くろしお出版.
- (1972a) 『現代語法序説——シンタクスの試み』, くろしお出版.
- (1972b) 『現代語法新説』, くろしお出版.
- (1972c) 『統現代語法序説』, くろしお出版.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店.
- 湯川恭敏 (1967) 「主語」に関する考察, 『言語研究』51号, 日本語学会.
- 吉本 啓 (1982) 「が」と「は」——それぞれの機能するレベルの違いに注目して, 『言語研究』81号, 日本語学会.
- 柳 濟 權 (1980) 「が」「は」의 意味 와 構文形態의 位置 와의 關係 에 대한 考察, 『言語教育』3, 誠信女子大学語学研究所.
- 洪 思 満 (1985) 「表別 과 極端例示 의 意味様相」, 『国語語彙意味研究』, 学文社.
- Chafe, Wallace. 1974. Language and consciousness. *Language* 50: 111-13.
- Kuroda, S. 1964. *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Ph.D. thesis Massachusetts Institute of Technology, Cambridge, Mass.
- Jackendoff, Ray S. 1978. Grammar as evidence for conceptual structure. In *Linguistic theory and psychological reality*, ed. Morriss Hall, Joan Bresnan, and George A. Miller. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Langacker, Ronald W. 1979. Grammar as image (manuscript).
- Wallace, Stephen. 1982. Figure and ground. In *Tense-aspect: Between semantics and pragmatics*, ed. Paul J. Hopper. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.